

プロローグ 龍光さんはなぜすべてを捨て得たのだろうか

香山リカ

私の選択はこれでよかったのか

インドの橙^{だいだいいろ}色の袈裟^{けさ}に身を包んだ小野龍光さんに初めてお会いしたとき、私は咄嗟^{とつさ}に言葉が出てこなかった。合掌しながら静かに仏式の挨拶をする龍光さんに、「こんにちは」と言っているのやら、「はじめまして」と言うべきなのか……。なんとご挨拶したのか忘れてしまったが、ああ、この方は本物だ、見せかけのパフォーマンスで僧侶の衣をまとっているのではない、ということだけはわかった。凡庸^{たふす}な言い方をすれば、厳しい修行を終えて安らかな境地を得た僧侶だけが醸し出す、有り難い佇まい^{たふす}のようなものが彼にはあって、それに私は気圧^{けお}されたのかもしれない。おだやかでやさしい物腰ではあるが、柔和に見えて眼光鋭く、それがまた俗世間からきつぱりと決別した強い意志にも思えた。

しかし、人はここまで変われるものなのだろうか。私の目の前で「得度して今はもう乞食同然の身で……」と謙虚にほほ笑む龍光さんは、つい一年数カ月前までIT業界の寵児ちやうじとして百億単位のお金を動かす敏腕経営者だった人である。東京大学理学部卒、同大学院を経て日本IBMに入社という輝かしい経歴も持つ。そんな人がなぜ地位も財産もすべてを捨てて得度したのか——私は、小野龍光という人の数奇な物語をがぜん聞いてみたくなった。

個人的な話になるが、私は二〇二二年の四月にそれまでの東京での大学教員や精神科医の仕事に一区切りをつけ、北海道のむかわ町むかわ国民健康保険穂別診療所というところで、新たな仕事を始めていた。その診療所は、いわゆる僻地診療所へきちと呼ばれる医療機関で、そこでの仕事はそれまでの大学病院や東京での精神科臨床のそれとはかけ離れていた。小さな診療所には科の区別もなく、どんな状況のどんな病気の人でも診ることが原則。このむかわ町穂別は、山あいの孤立した地区で、人口は二千五百人弱という不便な過疎地で、年々人口も減って、高齢化も進んでいる。隣接した市町村もなく、私が行ったその診療所以外、周囲五十キロ近辺には医療機関がひとつもないところだ。医者の仕事としては連続していても、仕事の内容は大幅に轉換した。おまけに命の危険さえ感じる厳しい自然環境のなかで、新しい生活を営んでいかなければ

ばならない。地元の人たちにとっては当然の感覚なのだが、店も少なく、食料調達するにも小さな店しかないので、今日食べる分はもちろん、数日分の食料は確保しておかないと、飢え死にしかねない。都会生活に慣れていた私にとっては、けっこうたいへんな意識改革を迫られた。

なにしろそれまで私が住んでいた都心のマンションの一階にはコンビニが入っており、夜中でも何でも手に入る便利な生活をしていたのである。もちろん、そんな便利な生活と過不足のない仕事に、これでいいのか、私は今まで人のために何かやってきたのだろうかと逡巡^{しゆんじゆん}し、今決断しなければ私ははずとぬるま湯のなかで何もしないまま終わってしまうに違いないと、都会での生活や仕事を捨てる決心をしたのである。